

現代の生活時間構造の変化と食料費

○元佐賀大学教育 出石康子 佐賀大学教育 小西史子

目的 生活の充実へのニーズが、モノの量の拡大・高質化から、心の満足・生きがいへとうつり、食生活の設計にも新しい目が求められるようになって来ている。今回は食事にかかわる生活時間の性格と、食料費の間にどのような関連があるのかを見出し、新しい生活時間の設計に対応する食料費の算定に、理論的な手がかりを得たいと考え手がけた。

方法 先づ現在の人々が食事に期待している機能を調べて、ここから目的消費（食べる楽しさに直結するもの）としての食料費部分を推定する。これを更に①食事の雰囲気を楽しむもの、②提供される料理の味・技能等を期待するものに分ける。前報に準じてこれら二者のそれぞれの平均倍率を求めて、目的消費としての性格の食料費部分にも、具体的な性格の特色のちがいによって、二者の平均倍率に差のある実態を把握する。この方法によって、幾とおりかのモデル的生活時間構造（特に目的消費時間の比率に視点をおいた）を設定し、多様な時間構造に対応した食料費の計画・検討のための基準を作成する。この結果を個別の家庭においても利用が出来るように、上記で得た基準値等をコンピュータに入力しておき、これに各人・各家庭等の時間構造と用いた食料費等を入力すれば、それに対する評価と共に、もし問題点があれば、改善方法等も提示されるようにする。

結果 物の時代から心の時代への変化は、人々に生活時間経営の重要さを、強く求めるようになったが、この新しい事態に、経済と時間とを統合した視点で対処できる、一つの具体例となり得るものと考える。今後ともその改善に努力したいと考えている。